

過疎化、限界集落化が進む一方で、地方創生、地方活性化での成功事例を見ることは、大いに励みになる。著者は地域に根付いた食文化を再発見することで、地域の元気を生み出し、ネットワーク作りをする専門家である。キーワードは、従来農業からの脱皮。そもそも戦後1万3000もあった農協が、現在では700弱しかないという現実がある。地域では農業の中心はもはやJAではなくなってきたのだ。この本を読んで驚くのが、米の生産農家の実態。米の引き渡し価格は、1俵1万円以下しかない。8500円という安値のこともあるという。10アールの耕地では、引き渡し価格1俵1万円として8・8万円の収益。生産費は14万957円。日本の平均的耕地である2・45ヘクタールで計算すると年間129万円以上の赤字となっている。

農水産物にはこれまでにない視点が必要となり、実際すでに変わりつつあると著者はいう。若い世代の料理家にとって、自分たちで素材探しをすることはもはや当たり前。地元にもともとあった地域の野菜や、形がそろわなくても、旬で

■内外情勢調査会講師

かなまる・ひろみ

1952年佐賀県生まれ。地域に根付いた食文化を再発見し、全国の地域活動のコーディネーター、アドバイスなどを行い、実践の場から発信。総務省地域力創造アドバイザーや内閣官房地域活性化応援隊地域活性化伝道師を務めるほか、さまざまな自治体のアドバイザーとして、また各行政機関と連携した食からの地域づくり、特産品のプロモーションなどを行う。主な著書に、「里山産業論—「食の戦略」が六次産業を超える」(2015年、角川新書)、「田舎力—ヒト・夢・カネが集まる5つの法則(新装版)」(2014年、NHK新書)など。



力のあるものが求められているというのだ。地元で獲れる流通に乗らないような魚介類、あるいは西洋種の野菜で独自に栽培したものも脚光を浴びる時代になっている。本書ではそうした例として、三重県が進める鹿肉、猪肉のブランド化「みえジビエ」、米を嗜好品として価値を高める兵庫県豊岡市や高知県中土佐町の事例などが紹介されている。ウーフ(WWOOF)という、有機農場に援農に行き、農場側は宿泊を受け入れるという新しい事例も、地方の「やる気」が伝わってきて興味深い。



タカラは足元にあり! 地方経済活性化戦略

金丸弘美 著

合同出版

本体1600円+税

四六判/184頁

発売日:2016年2月25日